



カトリック中央協議会
CATHOLIC BISHOPS' CONFERENCE OF JAPAN

会 報

《2021年8月号（590号）》

目 次

報 告

・常任司教委員会	1
・典礼委員会	3
・青少年司牧部門	3
・難民移住移動者委員会	4
・カリタスジャパン	5
公文書	8

常任司教委員会

■6月定例常任司教委員会

日 時 2021年6月3日（木）10:00-14:00

場 所 ウェブ会議

出席者 委 員 7人

事務局 8人

報 告

1. 第52回国際聖体大会につながる日本での行事について

国際聖体大会代表参加者の白浜 満司教から、第52回「国際聖体大会」（2021年9月5日-12日）につながる国内での行事に関する通知が届いた。この情報については、カトリック中央協議会ウェブサイト
で情報提供を行う。

2. カリタスジャパン東日本大震災関連収支について

2011年3月11日－2021年3月31日までの東日本大震災関連収支に関する報告がカリタスジャパン責任司教の菊地 功大司教から行われた。なお、同収支報告とともに、東日本大震災10年の歩みの評価を7月の臨時司教総会に提出する。

審 議

1. 2021年度第1回臨時司教総会の内容確認について
本年7月12日(月)－16日(金)開催予定の臨時司教総会で取り扱う事項を確認した。なお、議案の確定は7月の常任司教委員会で行う。
2. 世界代表司教会議(シノドス)第16回通常総会の準備について
教皇庁シノドス事務局から、2023年10月に開催予定である第16回シノドス(テーマ:“For a Synodal Church: communion, participation, and mission”ともに歩む教会のため—交わり・参加・そして宣教—)(邦題は仮訳)の準備を2021年10月から行う通知を受け、シノドス準備担当司教を7月司教総会で選出すること、シノドス事務局からの文書を邦訳して、各教区司教と教区事務局長に通知し、教区としてのコンタクトパーソンかチームの選出を依頼することを確定した。
3. アジア司教協議会連盟(FABC)50周年総会への提出文書について
2022年に開催予定のFABC50周年総会の国別報告書と発表文書の作成を、FABC総会代表参加者である高見大司教、菊地大司教、前田枢機卿、勝谷司教、バーント司教、アペイヤ司教、山野内司教に依頼することを承認した。
4. 新しい「ミサの式次第と奉献文」の実施について
日本の教会が申請していた「ミサの式次第と奉献文」ほか4文書が5月23日の聖霊降臨の主日付で教皇庁典礼秘跡省から認証されたことを受け、新しい「ミサの式次第と奉献文」実施に至るまでの手順ならびにその内容を承認し、2021年度第1回臨時司教総会中に掲記事案周知のための時間を設ける。
5. 教会博士の任意の記念日について
典礼委員会から提出された「聖グレゴリオ(ナレク)修道院長教会博士」(2月27日)、「聖ヨハネ(アピラ)司祭教会博士」(5月10日)の任意の記念日のミサの集会祈願と公開手続きを承認した。
6. 司祭生涯養成部門からの提案について
新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の感染状況を踏まえ、2022年1月19日から開催予定であった司祭生涯養成プログラムの実施を延期することを確定し、司祭生涯養成部門から提出されたその他の提案とともに、7月の臨時司教総会で報告する。
7. 広報担当司教からの提案について
広報担当司教の酒井俊弘司教から提出された、日本カトリック司教協議会とカトリック中央協議会の広報の充実に関する方向性については、7月の臨時司教総会の報告事項とする。
8. 2022年祈祷の使徒「日本の教会の意向」について
2022年祈祷の使徒「日本の教会の意向」(案)については、本常任司教委員会での諸意見を加味して修正し、7月の常任司教委員会に諮って確定する。
9. 2022年度日本カトリック司教協議会年間行事予定について
2022年度の定例司教総会、臨時司教総会(第1回、第2回)の日程案を申し合わせ、2021年度第1回臨時司教総会に提案する。
10. 中央協議会のITに携わる部署について
カトリック中央協議会事務局法人事務部内にITに携わる部署として、2022年1月から「情報システム課」を設置することと、本常任司教委員会に提案された職務分掌規程の一部改定を承認した。

典礼委員会

■『ミサ典礼書』改訂委員会

日 時 2021年6月21日(月) 10:00-14:30

場 所 ウェブ会議

出席者 5人

審 議

1. 年間と年間に祝う主の祭日の入祭唱・拝領唱の日本語訳を検討した。
2. 聖人固有(1月-6月)の入祭唱・拝領唱の日本語訳を検討した。

青少年司牧部門

■教皇庁信徒・家庭・いのちの部署(DLFL) ユースオフィス主催 「世界青年の日」オンライン会議

日 時 2021年6月8日(火) 19:45-23:20(日本時間)

場 所 ウェブ会議

参加者 132人(100カ国超)、カトリックより2人

目 的

「世界青年の日」(WYD) 教区レベルの実施を促す「指針」についての意見交換

報 告

ユースオフィスより「指針」についての概要説明

- (1) ユースオフィスのウェブページ

<http://www.laityfamilylife.va/content/laityfamilylife/en/GMGpastoralGuidelines.html>

- (2) 指針が発信された経緯と目的

- ・ユースオフィスはさまざまな意見を聞き、また青年司牧に責任を持つ信徒・家庭・いのちの部署の助言も求めた上で、2021年より各教区で祝うWYDを「受難の主日」から「王であるキリストの祭日」へ変更した。
- ・この祭日を通じて、新しい目を開き、心を新たにするために、教区レベルでWYD開催を推進している。
- ・国際大会は3年ごとであり、また、それに参加できる若者たちは限られているため、毎年開催する教区レベルのWYDを恒例のものとするよう、各地でWYDの価値を習慣づけていくことが期待されている。

- (3) 年毎のテーマ *引用の「」内は共同訳使用

2020 ルカ7章14節「若者よ、あなたに言う。起きなさい」

2021 使徒言行録26章16節「起き上がれ。自分の足で立て」

2022 ルカ1章39節「マリアは出かけて、急いで山里へ向かった」

意見交換

各国の現状にあわせた同指針の活用について、以下の要点で意見交換をした。

- (1) 開催日設定の柔軟性
- (2) WYDを通じたユース運動への動機付け
- (3) 教皇メッセージの発信
- (4) 「指針」各言語版の作成

難民移住移動者委員会

■第6回全国担当者・ネットワーク情報交換会

日 時 2021年6月3日(木) 14:00-15:00

場 所 ウェブ会議

出席者 16人

毎月の事務局会議前に、教区担当者・実務者ネットワークのオンライン情報交換会を開催している。各地での日本語ミサや外国語ミサの実施状況、生活困窮者への支援活動、コロナ禍で入管収容施設から出されたものの心身ともにダメージを受けている仮放免者の医療費の問題についてなどの分かち合いや課題提起があった。そうした中でも、大阪教区社会活動センターシナピスの「シナピスホーム」では、難民移住者の人々が主体的にエスニック料理の献立を考えたり、緊急事態宣言解除後に地域で行う貢献に向けて自分たちで話し合っていたり、カトリック東京国際センター(CTIC)では、外国籍の信徒たちにゴーヤの種を渡して育ててもらい、採れたゴーヤは「(食料支援に)野菜が欲しい」と言う人々に渡したり、前向きな活動を支えている。

アドボカシー・啓発プロジェクト報告では、政府の入管改定法案廃案を受け、今後の取り組みに向けての意見交換を行ったほか、政府の「本国情勢を踏まえた在留ミャンマー人への緊急避難措置」について情報提供があった。

■第6回事務局会議

日 時 2021年6月3日(木) 15:00-17:00

場 所 ウェブ会議

出席者 9人

報 告

1. 前回議事録を確認した。
2. 人身取引問題に取り組む部会(タリタクム日本)報告
3. 船員司牧部会(ステラマリス日本)報告
4. 新型コロナ・ベトナム人技能実習生ホットライン報告
5. 5月12日社会司教委員会拡大合同会議、社会司教委員会定例会議報告
6. 外国人住民基本法の制定を求める全国キリスト教連絡協議会(外キ協)報告

審 議

1. 2021年「世界難民移住移動者の日」(Towards ever wider “we”)に向けて
2. 「ストップ入管法キャンペーン」の今後について(真の「入管法改正」に向けて)、意見交換を行い、7月31日(土)にオンライン全国セミナー開催を決定した。講師は、難民支援に長く関わる駒井知会弁護士。そのほか今後の研修会などの企画について協議した。
3. 10月18日(月)-19日(火)全国担当者・実務者ネットワーク合同会議準備に向けて
4. ベトナム対応チーム作成『ゆるしの秘跡手順パンフレット』配布方法についての確認。
5. 複数の委員から援助に関する相談があり、今年度の緊急援助金について協議した。次回以降、継続して確認する。

■第18回タリタクム日本運営委員会

日 時 2021年6月23日(水) 14:00-15:30
場 所 ウェブ会議
出席者 11人

報 告

1. 前回議事録を確認した。
2. 活動報告
(1)タリタクム日本が企画した、タリタクムアジア オンラインセミナーについて(4月17日)
(2)タリタクムインターナショナルからの活動報告と情報共有
(3)ベトナム人技能実習生ホットラインについて
(4)各委員より、各地のケース報告

審 議

1. 8月に発行するタリタクム日本 Newsletter NO.9の内容と執筆者、スケジュールを確認した。
2. 7月30日、「人身取引反対世界デー」のオンラインの祈り企画の概要、役割分担を確認した。
3. 秋のオンラインセミナー企画は、10月16日(土)の午後に開催することが決まった。

■第4回船員司牧部会(ステラマリス/AOS)コア会議

日 時 2021年6月24日(木) 14:00-16:00
場 所 ウェブ会議
出席者 9人

審 議

1. 7月23日(金・祝)予定の全国会議について検討した。
 - ・検討に先立ち、前回2019年度全国会議(中期計画ワークショップ)をもとに作成したアクションプランの現状と課題を確認した。各自の現在の関心事を分かち合いながら、全国会議の目的を確認した。
 - ・具体的なプログラムと当日のスケジュールを決め、準備日程と役割分担について確認した。
2. 7月11日「船員の日」に向けて、船員の日メッセージや祈りの活用、教皇庁の国際コーディネーターから呼びかけのあった船員たちへの感謝を表す映像作成などについて話し合った。

カリタスジャパン

■第3回カリタスジャパン事務局会議

日 時 2021年4月26日(月) 13:30-15:30
場 所 ウェブ会議
出席者 10人

報 告

1. 部会報告
(1)援助部会報告(海外援助方針ワーキンググループ・東日本大震災救援募金残金取り扱い基準)
 - 海外援助方針ワーキンググループについて
 - 東日本大震災救援募金取り扱い基準について

(2) 啓発部会報告

- 11月3日全国セミナーについて

2. 6月15日札幌教区「出前研修」の準備進捗状況
3. 国際カリタス関係
 - (1) 国際カリタス管理基準のセーフガード基準について
 - (2) 国際キャンペーンについて
 - (3) 国際カリタス、カリタスアジアへの予算分担金について
 - (4) ラオスカリタスの立上げ支援について

審 議

1. 災害時の緊急対応サポートチーム（ERST）について
2. カリタスジャパン組織体制について
3. 社会司教委員会拡大合同会議でのカリタスジャパンからの意見について

次回日程 2021年5月31日（月） 13:30 ウェブ会議

■第4回カリタスジャパン事務局会議

日 時 2021年5月31日（月）13:30-15:30

場 所 ウェブ会議

出席者 9人

報 告

1. 援助部会・啓発部会報告
2. 教区担当者実行委員会の報告
3. 国際カリタス管理基準アセスメントについて
4. ワーキンググループの委員参画について

審 議

1. 6月11日、カリタスジャパン委員会部会合同会議について
標記会議についての審議事項、議案などについて検討した。
2. カリタスジャパン組織体制の見直しについて
課題の共有と今後の方針を確認した。
3. 募金の呼びかけ開始手順と方法について
カリタスジャパンの募金の呼びかけについての確認を行った。

次回日程 2021年7月19日（月） 13:30-15:30 ウェブ会議

■第3回カリタスジャパン委員会・部会合同会議

日 時 2021年6月11日（金）13:00-15:00

場 所 ウェブ会議

出席者 19人

欠席者 5人

陪 席 3人

報 告

1. 事務局報告
 - (1) 6月15日札幌教区「出前研修」(全道司祭大会)の準備進捗状況
 - (2) 国際カリタス管理基準アセスメント
 - (3) 『WE ARE CARITAS 22号』の準備状況
 - (4) カリタスジャパン組織体制の課題共有
2. 援助部会報告
 - (1) 援助審査報告
 - (2) 援助実績報告
 - (3) 海外援助方針ワーキンググループについて
3. 啓発部会報告
 - (1) 第4回支援報告会
 - (2) 11月3日(水・祝)全国啓発セミナーについて
 - (3) 2022年以降のカリタスジャパン啓発部会の体制
4. 教区担当者実行委員会報告
 - (1) 「四旬節キャンペーン」の振り返り
 - (2) 全国教区担当者会議について
 - (3) 11月3日全国啓発セミナーへの協力について
 - (4) 教区担当者実行委員会のあり方について

次回日程 2021年8月27日(金) 13:30-15:30 ウェブ会議

■第3回援助部会会議(1日目)

日 時 2021年6月16日(水) 9:30-12:00

場 所 ウェブ会議

出席者 8人

報 告

1. 2020年から2021年の5月までの援助実績について報告があった。
2. 新型コロナウイルス感染症緊急募金について、引き続き呼び掛けていくことを確認した。

審 議

1. 援助審査

海外案件8件、国内案件4件を審査し、以下のとおり海外6件、国内2件を承認し、国内の仮承認案件については、確認事項の回答を待って承認とすることが確認された。

(1) カリタスモンゴル	「組織強化支援」	25,000 ドル
(2) カリタスモンゴル	「デイケアセンター」	25,000 ドル
(3) カリタスカラチ	「被強制退去者支援」	15,163 ドル
(4) カリタスラオス	「カリタスアジア経由カリタス立ち上げ」	10,000 ドル
(5) カリタスネパール	「新型コロナウイルス感染症対応」	20,000 ドル
(6) カリタスイラク	「新型コロナウイルス感染症対応」	10,000 ドル
(7) 鹿児島おいどんダルク	「入所施設の立ち上げ」	2,000,000 円
(8) カリタスみちのく	「ネットワーク立ち上げ支援」	250,000 円
(9) PEACE	「在日ミャンマー人自助グループによる生活困窮者支援」	2,000,000 円仮承認

■第3回援助部会会議（2日目）

日 時 2021年6月22日（火）10：00－12：00

場 所 ウェブ会議

出席者 9人

審 議

1. 特定意向募金決定の流れについて審議し、前任者への確認事項が明確にされるとともに、本件を継続審議とすることが確認された。
2. 東日本大震災救援募金の残金による今後の活動支援方針について意見交換し、継続審議とすることを確認した。
3. 各部会から作業部会（ワーキンググループ）への委託プロセスについて意見交換し、作業部会の目的、方法、期間など、共有すべき項目は議事録に残し共有することが確認された。

次回日程 2021年8月3日（火） 9：30－12：00 ウェブ会議

<会報 2021年8月号 公文書>

2021年 船員の日メッセージ

2021年 船員の日メッセージ

教皇庁人間開発のための部署は、7月の第2日曜日（今年は7月11日）を「船員の日」と定め、世界中の司牧者、信徒に船員たちのために祈るよう呼びかけています。日本カトリック難民移住移動者委員会も、船員たちとその家族のために祈るよう皆様に呼びかけます。

生活をつなぐ海路 — 船員が支える命の道 —

日ごろ、気に留めることはあまりありませんが、私たちの生活に必要な様々な物資や品物の多くは、海を介して運ばれています。したがって、世界の国々は「海路」（詩編 8：9）によって互いに結ばれていると言っても過言ではありません。

海とその労働者：教皇フランシスコが大切にされている「周縁（ペリフェリア）」

海の世界とそこで行われる人間の活動は魅力と価値のあるものですが、海で働く漁業従事者や船員たちには陸上とは異なる特別の厳しさがあります。大きな経済の課題にも直面しなければなりませんし、新型コロナウイルス感染症パンデミックの影響もより大きく、より深刻です。船員たちの多くは、ワクチンも受けられず、港に寄港しても船から降りて街に出かけることを許されず、中には契約期間を大幅に超えて18ヶ月間も交代できずに乗船したままで働いている人もいます。陸上での人々の活動がほぼ止まっている間でさえ、物資や商品の運搬のほとんどを担い続け、特に、重症の方に必要な医療機器を世界のどこまでも届けたのでした。

ですから、教皇フランシスコは、厳しい条件の中で働く海の人々に特別に思いを馳せ、感謝し、こうした人々のために祈るようにと勧められています。そして教皇は、海の使徒職（ステラマリス）を通しての司牧的奉仕がさらに増えるように願ってられています。船員司牧は、1920年から100年を越えて行われ、現在、全世界で約300の港でチャプレンによる奉仕が行われており、インターネットを通しても船上の船員と世界中の港がつながっています。

「ラウダート・シ」の呼びかけに合わせて

海の環境保護のために様々な努力がなされています。近い将来、海がもっときれいになるようにと願い、船からの汚染物質投棄の減少への努力（たとえば、船倉の洗浄水を海に流さないなど）、空気が汚染されないような燃料を探す努力も行われています。

海のプラスチックごみ減少への努力も喫緊の課題です。釣り針や網に、魚の代わりにプラスチックごみがかかる状況で、漁業従事者たちはごみを海に戻さず持ち帰ります。魚の代わりにごみを取らざるをえない現状は、私たち一人ひとりの責任でもあります。地球の大部分は水から出来ていて、その水の循環によって私たち生き物の営みが支えられていることを思い起こし、船員たちや漁業従事者に任せきりにすることなく、一日も早くきれいな地球環境を回復する努力を一緒にいたしましょう。

慈しみ深い神よ、わたしたちの生活を支えるために
今日もいのちをかけて世界の海を航海しているすべての船員たちとその家族を
あなたの恵みで満たし、真の幸せに導いてください。
母なる教会は、一人ひとりの霊的・物質的必要に応えてきました。
1920年から船員司牧に関わる全世界の司祭、修道者、ボランティアスタッフと心をつなぐに合わせ、
100周年を越えて、これからも船員たちとともに歩むことが出来ますように。
神の母聖マリア、海の星、すべての船員たちとその家族を母の愛で包んでください。
離れ離れになっても、あなたの御子イエスのうちに一つに結ばれ、
家族の絆を守り育てることが出来ますように。アーメン

2021年7月11日
日本カトリック難民移住移動者委員会
担当司教 マリオ山野内倫昭

カトリック教会の船員司牧（Apostleship of the Sea=AOS）はローマ教皇庁の人間開発のための部署の下にあり、世界各国を移動する船員たちの福利、厚生、医療、霊的なケア、家族の支援のために世界中の港で活動しています。2020年に100周年を迎え、正式名称が「ステラマリス」（海の星）となりました。日本カトリック難民移住移動者委員会船員司牧部会では100周年にあたり、上記の祈りを作成しました。

Message for the Day of Seafarers 2021

Message for the Day of Seafarers 2021

The Vatican's Dicastery for Promoting Integral Human Development has designated the second Sunday in July each year as Sea Sunday. It calls for prayers for seafarers on July 11 this year. The Catholic Commission of Japan for Migrants, Refugees and People on the Move also invites you to pray for seafarers and their families.

The Paths of the Seas That Connect Life

– The Paths of Life that Seafarers Support –

We may not think about it each day, but many of the things that support our lives come to us over the sea. It is no exaggeration to say that the nations of the world are connected to each other by “the paths of the seas” (Psalm 8:9).

The Seas and Its Workers: One of Pope Francis' Cherished "Peripheries"

Though the world of the sea and the human activities that take place there are attractive and valuable, fishers and seafarers face unique dangers that differ from land. In addition to facing the usual significant economic challenges, they especially feel the impact of the COVID-19 pandemic. Most seafarers have not yet been vaccinated and are not allowed to go ashore and relax when they call at a port. Some have been forced to remain on board ship for 18 months, well beyond their contract period. Even while people's activities on land were almost stopped, seafarers have continued to carry most of the goods the world needs, especially delivering medical supplies necessary for critically ill people all over the world.

Therefore, Pope Francis has expressed his special concern and gratitude to the people who work in harsh conditions at sea and has asked that we pray for them. The pope has called for even more pastoral service through the Apostleship of the Sea (Stella Maris). The organization has served seafarers since 1920, and currently serves about 300 ports worldwide, connecting chaplains in ports around the world with seafarers through the Internet.

Responding to the call of *Laudato Si'*

Various efforts are being made to protect the marine environment. These include efforts to soon reduce the dumping of pollutants from ships (for example, wash water from holds) and to develop fuels that do not pollute the air.

Plastic waste in the sea is another urgent issue. When it happens that fishhooks and nets catch plastic waste instead of fish, fishers must take that “catch” back to land

rather than dumping it back into the sea. This situation in which we catch waste instead of fish is also the responsibility of each of us. We must not forget that most of the earth is water, and water makes possible the flourishing of all creatures, including us. Therefore, we must not leave responsibility to seafarers or fishers, but must all work together to restore a clean global environment as soon as possible.

O merciful God, bless seafarers and their families with your grace and lead them to true happiness as they sail the seas of the world to support our lives.

The Mother Church responds to their spiritual and material needs.

For more than a century, priests, religious, and volunteer staff all over the world have united as the Apostleship of the Sea to provide pastoral care to seafarers.

We ask your grace to continue this service.

**Mary, Mother of God and Star of the Sea,
enfold seafarers and their families in your motherly love.**

**Though they are scattered across the globe, may they remain united
in your Son Jesus
and protect and nurture their family ties. Amen.**

July 11, 2021

Mario Michiaki Yamanouchi

Bishop in Charge

Catholic Commission of Japan

for Migrants, Refugees and People on the Move

The Catholic Church's Apostleship of the Sea (AOS) is under the Vatican's Dicastery for Promoting Integral Human Development and works in ports around the world to support the well-being, welfare, medical care, spiritual care, and families of seafarers. In 2020, AOS celebrated its 100th anniversary, and changed its official name to "Stella Maris" (star of the sea). To mark the centenary, the Seafarers' Section of the Catholic Commission of Japan for Migrants, Refugees and People on the Move created the above prayer.

第1回「祖父母と高齢者のための世界祈願日」 教皇メッセージ

第1回「祖父母と高齢者のための世界祈願日」教皇メッセージ

2021年7月25日

「わたしはいつもあなたとともにいる」

親愛なる祖父母の皆さん、

「わたしはいつもあなたとともにいる」(マタイ 28・20 参照)——これは、主が天に昇る前に弟子たちにした約束であり、今日主があなたにも、親愛なる祖父母の皆さんにも、繰り返しておられるものです。あなたに対してです。「わたしはいつもあなたとともにいる」——これは、ローマの司教として、またあなたと同じ高齢者であるわたしからあなたに、この第1回「祖父母と高齢者のための世界祈願日」の機会にお伝えしたいことばでもあります。全教会があなたのそばに、正確にはわたしたちのそばにいます。教会はあなたを案じ、あなたを愛していて、あなたを独りにしておきたくはないのです。

このメッセージが、大変な時期にあなたに届けられることをわたしはよくよく承知しています。パンデミックは予期せぬ激しい嵐、皆の生命に迫る厳しい試練ですが、わたしたち高齢者は特別な処遇を、より過酷な処遇を受けています。わたしたちの多くが病にかかりましたし、大勢のかたが亡くなるのや、配偶者や愛する人の死を目にしました。多くの人が、隔離によって長期にわたる孤独に苦しみました。

主は、このようなときのわたしたち一人ひとりの苦しみを知っておられます。離されているというつらい経験をした人々のそばにおられます。わたしたちの孤独——パンデミックによってさらなるものとなった——は、主にとってどうでもよいことではありません。イエスの祖父である聖ヨアキムも、子どもがいなかったために共同体から孤立していたと伝えられています。彼の人生は、妻アンナ同様、無益なものともみなされていました。けれども主は天使を遣わして彼を慰めました。彼が悲しみに暮れて町の門の外に立っていると、主のみ使いが現れていました。「ヨアキム、ヨアキム、主はあなたの執拗な祈りを聞き入れられました」¹。ジョットの有名なフレスコ画の一つ²では、この場面はおそらく夜です。わたしたちがよく知る、追想、心配事、願い事でいっぱい、眠れぬ夜の一つです。

けれども、このパンデミックの数か月のように、何もかも真っ暗に思えるときでも、主は天使を遣わし、わたしたちの孤独を慰め続け、「わたしはいつもあなたとともにいる」と繰り返しておられます。そうあなたにいておられ、わたしに、皆にいておられるのです。これこそが、長い間の孤独と、いまだ時間がかかっている社会生活の回復とを経て、まさに今年に、初回を迎えるこの祈願日の意義です。祖父母の皆さん、高齢者のお一人お一人が、とくに孤独に苦しむかたがたが、天使の訪問を受けられますように。

それは、孫の顔であることもあれば、家族の顔、古くからの友の顔、またこの苦しい時期に出会った人々の顔であることもあります。今回のことでわたしたちは、抱擁と訪問が一人ひとりにとってどれほど大切であるかを学びました。場所によっては、これがまだかなわずにいることに、わたしは強く心を痛めています。

¹「ヤコブ原福音書」の中で語られる話。

²「祖父母と高齢者の世界祈願日」のロゴマークに選ばれた画像。

それでも主は、わたしたちの人生に決して欠けることのないみことばを通して、わたしたちに使者を遣わしておられます。毎日、福音書を読み、詩編をもって祈り、預言書を読みましょう。主がまことのかたであることに心打たれるでしょう。聖書は、主が今日、わたしたちの人生を通して何を求めておられるのかを理解する助けにもなります。主は、一日のいつであっても、人生のどの時期にあっても、ご自分のぶどう園に働き手を送り込まれます（マタイ 20・1—16 参照）。身をもってあかしできるのですが、わたしがローマの司教の召命を受けたのは、いわゆる定年を迎え、これ以上新たなことはできないだろうと思い込んでいたときでした。主はいつもわたしたちのそばにいてくださいますが、いつでも、新たな招きをもって、新たなことばとともに、慰めを携えておられ、いつもわたしたちのそばにいてくださいます。お分かりでしょうか、主は永遠であり、決して引退なさいません。決してです。

マタイ福音書で、イエスは使徒たちに命じています。「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしてください。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい」（28・19—20）。このことばは、今日のわたしたちにあてたものでもあり、わたしたちの召命は、ルーツを守り、若者に信仰を伝え、幼い子の世話をすることだということをよく理解する助けとなります。よく聞いてください。今日、この年齢であるわたしたちにとって何が召命なのでしょう。ルーツを守ること、若者に信仰を伝えること、幼い子の世話をすることです。それを忘れないでください。

いくつであろうと、仕事を続けていようがいまいが、一人暮らしだろうが家族と一緒にだろうが、若くして孫をもとうが老齢になってであろうが、自立できていようが支援が必要だろうが、関係ありません。福音を伝える務め、孫たちに伝統を伝える務めに定年などないのです。動き出さなければ、何よりも新しいことに取り組もうと自分自身の外へ出なければならないのです。

ですから、歴史の決定的な瞬間に、あなたにもまた新たな召命があるのです。ですがあなたは疑問に思うでしょう。そんなことがどうしてできようか。わたしのエネルギーは尽きかけていて、これ以上はできそうもない。習慣がすっかり生活の規範になっているのに、違ったことをやり始められるなんて、どうしたらできるのか。家族の心配事をすでにたくさん抱えているのに、困窮者のために力を注ぐなんて、どうしたらできるのか。住んでいる家を出ることも許されなくて、どうすれば視野が広げられるのか。わたしの孤独は、重すぎはしないか——と。皆さんの多くが思うでしょう。自分の孤独は担うには重すぎやしないかと。イエスご自身、ニコデモから同じような質問を受けました。ニコデモは尋ねました。「年をとった者が、どうして生まれることができますよう」（ヨハネ 3・4）。主は、それは起こりうることなのだと、思いのままに吹く聖霊の働きに心を開くことで可能になるのだと、お答えになります。聖霊は、もっておられる自由さをもって、どこにでも行かれ、望むままに働かれるのです。

さまざまな機会に何度も申し上げてきましたが、世界が置かれた危機を経た後に、わたしたちが以前と同じはずはありません。よくなっているか、悪くなっているかです。ですから、「どうかもう、わたしたちがそこから学んでこなかった歴史に——わたしたちは何と頭が固いことか——、別の深刻なエピソードを加えることにはなりませんように。……人工呼吸装置の不足で亡くなった高齢者を、どうか忘れずにいられますように。どうか、これほどの苦しみが無駄になることなく、新たな生き方へと飛躍できますように。わたしたちには互いが必要で、互いに対し義務を負っていることに、はっきり気づけますように。……人類として、新たに生まれるために——」（回勅『兄弟の皆さん』35）自分で自分を救える人はいません。それぞれがそれぞれから助けられているのです。皆、兄弟姉妹なのです。

この点からお伝えしたいのは、兄弟愛と社会的友愛をもって明日の世界を、嵐の後にわたしたちと子どもと孫とが生きる世界を築くには、あなたが必要なのだということです。わたしたちは皆、「傷ついた社会の回復と支援に、積極的に参与しなければなりません」（同 77）。この新たな構造を支えるべき多種多様な柱の中に、あなたが助けとなって他の人よりもよく配置できる三つの柱があります。夢、記憶、祈りという三つの

柱です。主がそばにいてくだされば、わたしたちの中のもっとも弱い人にも、夢、記憶、祈りの道を通して、新たな歩みを踏み出す力が与えられるでしょう。

預言者ヨエルはあるとき、次のような期待を告げました。「老人は夢を見、若者は幻（ヴィジョン）を見る」（3・1）。世界の未来は、若者と老人のこうした結びつきにあります。若者のほかに、いったいだれが、老人たちの夢を受け継ぎ、それを推し進めることができるでしょうか。しかしそのためには、夢を見続けることが必要です。正義、平和、連帯を求めるわたしたちの夢の中に、若者たちが新たな幻（ヴィジョン）をもつ可能性が秘められており、わたしたちはともに未来を築けるのです。あなたはまた、つらい体験から新たにされて出発することは可能であるとあかししなければなりません。そしてそれは一度だけではないはずで、あなたは人生の中で何度もそれを経験し、そのつどどうにかそれをくぐり抜けてきたからです。その経験から学ぶことで、今もそこから抜け出すのです。

したがって夢は、記憶とともに織り成されています。わたしは、戦争のつらい記憶はどれほど重要であるか、新しい世代がそこから平和の価値をどれほど学ぶことができるかを思います。そして、それを伝えるのはあなたです。あなたは戦争の苦しみを生き抜いたのです。覚えておくということは、すべての高齢者の真の使命です。覚えておくこと、そして記憶を他の人に伝えることです。ホロコーストの悲劇を生き延びたエディス・ブルックは次のように語りました。「たった一人の人の良心を照らせたならばそれだけでも、これまでの、そしてこれからも続く記憶を鮮明に保つ、苦勞とつらさを吹き飛ばすだけの価値があります。わたしにとって、記憶とは生きることです」³。わたしはまた、わたしの祖父母のことを思い、皆さんのうちで、移住せざるをえず、家を離れることがどれほどつらいかをご存じのかたがたのことを思い起こします。今日もなお、多くの人が、未来を求めてそうしています。そうした人の中には、わたしたちに付き添い、面倒を見ている人がいるかもしれません。そうした記憶は、より人間的で、人々を受け入れる世界を築く助けとなります。逆に記憶がなければ、そうした世界を築くことはできません。基礎がなければ家は建ちません。決して。そして、人生の基礎は記憶なのです。

最後は祈りについてです。わたしの前任者である教皇ベネディクト、教会のために祈り働き続けておられる聖なる老人は、以前次のように語りました。「高齢者の祈りは世界を守り、おそらく多くの人の必死のものがきよりも的確に、世界を助けることができます」⁴。教皇職の終わり近く、2012年にこう語ったのです。すばらしい。あなたの祈りは、価値ある資源なのです。教会と世界がそれなしではいられない「肺」なのです（使徒的勧告『福音の喜び』262参照）。人類にとって困難なこの時期にこそ、全員が同じ船に乗り、パンデミックという嵐の海を行く中であって、世界と教会のためのあなたの執り成しの祈りはむなしなものではなく、むしろすべての人に、到着地についての泰然たる確信を示してくれます。

親愛なる祖父母の皆さん。このメッセージを終えるにあたり、皆さんに福者——まもなく聖人となる——シャルル・ド・フーコーの模範も示しておきたいと思います。この人はアルジェリアで隠者として生活し、そうした辺境で、「どんな人をも兄弟だと思えるようになりたいという強い望み」（回勅『兄弟の皆さん』287項）をあかししました。彼の人生が伝えているのは、自分自身の砂漠の孤独にあっただとしても、世界中の貧しい人のために執り成しの祈りをささげ、真に、すべての人の兄弟姉妹となることはできるのだということです。

主に願い求めます。そして主の模範によって、わたしたち一人ひとりが、心を広くし、もっとも追いやられた人の苦悩に敏感になり、彼らのために執り成すことができますように。「わたしはいつもあなたとともに

³ La memoria è vita, la scrittura è respiro（記憶は生きること、書くことは呼吸すること）。L'Osservatore Romano (26 enero 2021).)

⁴ 教皇ベネディクト十六世「施設『ピバ高齢者』訪問時の講話（2012年11月2日）」参照。

いる」——今日耳にしたわたしたちへの慰めのこのことばを、すべての人、とくに若者たちに、繰り返し伝えることを、わたしたち一人ひとりが学ぶように。くじけず行きましょう、勇気を出して。主の祝福がありますように。

ローマ

サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ大聖堂にて

2021年5月31日

聖母マリアの訪問の祝日

フランシスコ

第1回「祖父母と高齢者のための世界祈願日」のための祈り

第1回「祖父母と高齢者のための世界祈願日」のための祈り

主よ、
ともにいてくださるあなたの慰めに感謝いたします。
孤独なときも、
あなたはわたしの希望、信じる心のよりどころです。
若いときから、あなたはわたしの岩、わたしのとりです。

わたしに家族を与え、
長寿をもって祝福して下さったことに感謝いたします。
喜びのときも困難なときも感謝し、
人生ですでに実現した夢と、この先にある夢に感謝いたします。
わたしを招いて下さった、この新たな実りの時に感謝いたします。

主よ、わたしの信仰を強め、
わたしをあなたの平和の道具としてください。
わたしよりも苦しんでいる人を抱き締めること、
夢を見続けること、
そして、新たな世代にあなたの素晴らしさを伝えることを教えてください。

教皇フランシスコと教会を守り、導いてください。
福音の光が地の果てにまで届きますように。
主よ、あなたの霊を送り、世界を新たにしてください。
パンデミックの嵐が静まり、
貧しい人が慰められ、戦争を終わらせることができますように。

弱いわたしを支え、
世の終わりまで、
日々、あなたがともにおられることを確信し、
あなたが与えてくださる一瞬一瞬を
精いっぱい生きることができるよう助けてください。
アーメン。

第1回「祖父母と高齢者のための世界祈願日」典礼に関する覚え書き

第1回「祖父母と高齢者のための世界祈願日」典礼に関する覚え書き

- 7月25日（日）のミサのうち一回は、「祖父母と高齢者のための世界祈願日」を祝うためにささげることができる。
- ミサへの高齢者の出席を推奨するために、共同体のメンバーは、独力で来ることのできない人々のための交通手段を手配することができる。
- ミサの間、小教区や共同体の若者は、祖父母や高齢者に教皇メッセージを朗読することができる。
- 7月25日と、その直前直後の日に、世界祈願日のためのミサを病院や高齢者施設でささげることができる。可能な場合、衛生上の規則に従って、ミサの雰囲気づくりのために小教区のメンバーが参加すべきである。
- この世界祈願日のためのミサの献金は、その共同体の貧しい高齢者の支援プロジェクトを支えるために用いることができる。

■説教のための資料

年間第17主日-B年

列王記下4・42-44、詩編145、エフェソ4・1-6、ヨハネ6・1-15

- 今日、祝っているこの世界祈願日は、若者も高齢者も、祖父母も孫たちも、同じ家庭に属していてもいなくても、わたしたち全員は「体は一つ、霊は一つです。それは、あなたがたが、一つの希望にあずかるようにと招かれているのと同じです」ということを理解するための助けとなります。このようなことを自覚することによって、わたしたちは慰められ、主がいのちのパンと救いのみことばを増やす祭壇を囲む一つの民へと形作られます。若者と同様、高齢者も大切です。高齢者がいないと、教会のからだには何か欠けています。それだからこそ、わたしたちの各共同体の中で、高齢者が自分にとってふさわしい場を持つことが必要となります。主が御からだと御血をわたしたちに与え、イエスご自身のいのちをともしにする者としてくださったように、わたしたちが高齢者のいのちをともしにすることは重要です。
- 主の周りに一つの民として集まるわたしたちは、同じ家族の一員であることの素晴らしさと、年を重ねたわたしたちであっても、唯一の御父の愛すべき子であると感じることのできる素晴らしさを見いだします。ですからわたしたちは、教皇が回勅『兄弟の皆さん (Fratelli Tutti)』で語るように、わたしたちは一人では救われないということを理解するのです。これはイエスの周りに集まった五千人の人々が経験したことであり、今日、パンデミックの影響を今もなお受けている時代に生きるわたしたち皆に

とつても明らかです。高齢者は自分たちだけで救われることはできません。それは、高齢者が自分の夢を歩み出すために力強い脚を必要としているからです。若者は自分たちだけで救われることはできません。それは、闇夜からであっても新たな夜明けの太陽は昇ることができるということを、だれかが彼らに告げなければならないからです。

- 福音書で示された場面は、日常の家庭生活にあっても、わたしたち一人ひとりが所有しているものが何であれ、それがわたしたち皆にとっていかに偉大な資源となりうるかを理解させてくれます。わたしたちが聞いた箇所の中で、一人の少年がイエスのところに「大麦のパン五つと魚二匹」を持ってきます。今日、祖父母のほう物質的な財を所有しているのが普通です。しかし大切なのは、持っているものが多いか少ないかではなく、わたしたちのパンを増やし、生きていくすべての人の望みを確実に満たしてください。主にそれを差し出すことです（詩編 145）。祖父母には、若い世代に信仰を伝え、自分の知恵をもって孫たちとともに歩むという具体的な役割があります。若い世代が自分のルーツを見失わずに、確固とした基礎の上に人生を築けるよう、祖父母たちが彼らを助ける必要があります。
- わたしたちが持っているものは、時に物質的なものではありません。祖父母のことを思い浮かべてみると、しばしばわたしたちの家庭にもたらしてくれたのは、まさに無償の贈り物です。過保護と思われるような祖父母による孫たちの愛し方や甘やかし方は、わたしたちからすれば大げさに見えるかもしれませんが、けれども、大げさなことこそが唯一の愛の尺度なのです。シリアの聖エフレムは、このヨハネ福音書の一節について、自分の孫に対する祖父の態度を描写するようなことばで解説して、こう記しています。「彼はわたしたちに無償で贈り物を与えてくれただけでなく、愛情をもってわたしたちを甘やかしてくれました。……わたしたちの魂を生かすものへと導くために、この口当たりの良い食べ物でわたしたちを引き寄せたのです……」。
- 教会は、主の周りに集まる民の母であり、また自らを養うことができないような人々の母でもあります。教会は、わたしたち一人ひとりを必要としています。ちょうど今日の福音書で、主が一人の少年の助けを認めたことを聞いたように、高齢者の信仰と知恵をいや増すことが、今日、必要だと思われまゝ。高齢者の霊的深さの中に、発見されるべき宝があります。教皇はしばしばこのことをお話しになりました。信徒・家庭・いのちの部署が主催した「長年にわたる人生の豊かさ」という会合において、教皇は、高齢者は「子どもや若者を、信仰において教育する上で欠くことのできないきずなである」と語られました。高齢者をわたしたちの司牧の地平に加え、共同体の重要な構成メンバーの一員として、一時的ではないやり方で配慮することにわたしたちは慣れなければなりません。高齢者は単に、わたしたちが保護しなければならない人々ではありません。神の誠実な愛をあかする榮譽を得た人として、福音化のための司牧的な奉仕職の主演となりうる人たちなのです。
- わたしたちの中でもっとも貧しく力ない人々でさえ、愛と祈りという、これら二匹の魚を持っています。祈ることはすべての人に与えられた召命です。この世界祈願日のメッセージの中で、教皇はベネディクト十六世が、祈りは高齢者にとって特別の使命であると語ったことを引用しています。「高齢者の祈りは世界を守り、おそらく多くの人の必死のものがきよりも的確に、世界を助けることができます。あなたの祈りは価値ある資源なのです。教会と世界がそれなしではいられない『肺』なのです（使徒的勧告『福音の喜び』262 参照）。とくにこの時期、……世界と教会のためのあなたの執り成しの祈りはむなしなものではなく、むしろすべての人に、到着地についての泰然たる確信を示してくれます」。
- マルコ福音書の並行箇所（6・41）で、主イエスはパンを群衆に分ける務めを弟子たちに託します。それは、今日の教会にまで託され続けている務めです。わたしたちだけで奇跡を行うことはできません。必要としている人がパンによって養われるために、イエスはわたしたちの手を必要としています。わたしたちの小教区において、どれだけ多くの高齢者が聖体授与の奉仕者となり、また他の奉仕の務めもっているか考えてみましょう。そして、このことがわたしたちの共同体の生活と典礼のためにどれだけ貴重なことか、考えてみましょう。

■共同祈願とパンデミックで亡くなった高齢者を思い起こすための提案

- いのちのパンと救いのことばを増やす奇跡を日々行っている教会のために祈ります。だれひとり、体の栄養と、信仰から生まれる希望を欠くことがありませんように。教皇フランシスコの奉仕職のために祈りましょう。
- わたしたち高齢者全員が、謙遜、優しさ、寛大さをもって、いただいた招きにふさわしく生きることができるよう祈りましょう。わたしたちの弱さが、愛において強くあること、貧しい人の慰めとなること、若者たちの支えとなることを妨げることが決してありませんように。
- パンを求める空腹と、世界の平和への渴望に直面している若者たちのために祈ります。彼らが、もっているものの少なさに決して落胆することなく、他のすべての人を助け養うという主の招きに従うことができますように。
- わたしたち祖父母のために祈ります。知恵をもって自分の家族とどのように寄り添うべきかを理解し、信仰の遺産を孫や若い世代に伝えることを学ぶことができますように。
- 孤独で、抱擁のぬくもりを求める高齢者のために祈ります。だれもが、孤独な生活を送る必要はなく、すべての人が天使の訪問を受け、「わたしはいつもあなたがたとともにいる」という主の約束が一人ひとりの人生にも向けられていると感ずることができるようになります。
- すべての病者がいやされ、パンデミックの嵐が静まるように祈りましょう。悪の脅威に直面している人を、決して独りにしないことをわたしたちが学び、最貧国を含め、すべての人に援助が保証されますように。
- 若者も高齢者も、わたしたち全員が、一つの召命、一つの信仰、一つの洗礼を受けたことを自覚し、自分の人生を、平和、仲間との交わり、他の人々との友情にささげることができますように。
- 神よ、だれからも思い起こされなかった人々も含め、わたしたちの共同体で、パンデミックのためにこの数箇月の間に亡くなったすべての高齢者を思い起こして祈ります。あなたの平和といつくしみのみ国に、このかたがたを迎え入れてください。
- とくに、・・・を思い起こして祈ります。
一人ひとり、パンデミックの間に亡くなった小教区や地域の高齢者の名前を読み上げる。それぞれの名前の後に、一本のろうそくに火をともし。
名前を読み上げるとき、奏楽を添えることもできる。

■派遣の祝福

長寿の祝福

いづくしみ深い神よ、
あなたはご自分の子らに、長寿のたまものをお与えになりました。
このかたがたは、あなたの祝福を願っています。
ともにおられるあなたの優しさと力強さを感じることができますように。
過去を振り返るとき、
あなたのいづくしみの中で喜ぶことができますように。
未来に目を向けるとき、
消えることのない希望をもち続けることができますように。
誉れと栄光があなたに、世々とこしえに。

第1回「祖父母と高齢者のための世界祈願日」司牧の手引き

第1回「祖父母と高齢者のための世界祈願日」 司牧の手引き

「祖父母と高齢者のための世界祈願日」の制定は、この数か月の世界各地における、パンデミックと高齢者世代の苦しみに特徴づけられたときに決定しました。高齢者がだれにも看取られることなく亡くなり、葬儀すら出せないという話を聞いて、教会は強い痛みを感じてきました。それは、今年の聖金曜日、教皇による十字架の道行においてまさに心に刻まれた、現代の十字架の一つです。「防護服、手袋、マスク、フェイスシールドを着用した宇宙飛行士のような恰好の人たちが、救急車から飛び出してきました。彼らは、呼吸困難になったわたしの祖父を連れて行きました。祖父を目にしたのは、それが最後でした。数日後に、祖父は病院で亡くなりました。どれほど心細かったことでしょうか。実際にそばにいて、さよならを伝え、慰めてあげることができませんでした」¹。

苦しむ人に寄り添えないということは、あわれみを示すというキリスト者の召命とは相いれません。この世界祈願日は、教会は十字架を背負うこうした人々から距離を置いたままでは決していられないことをあらためて知る機会となります。教皇が選んだ「わたしはいつもあなたとともにいる」というテーマは、パンデミックの間、そして訪れるはずの状況改善の時期に、すべての教会共同体は高齢者とともにい続けたいという望みの、はっきりとした表現です。

パンデミックの第一波が最高潮に達した1年以上前に、信徒・家庭・いのちの部署は書いています。「個人として地方教会として、わたしたちには高齢者のためにできることがたくさんあります。彼らのために祈ること、孤独という病をいやすこと、連帯のネットワークを活性化することなどです。深刻な打撃を受けた時代状況に直面して、わたしたちは共通の責任を負っているのです」²。嵐が過ぎ去ったときにこのことは、小教区と教会全体の生活の中で、通常の次元で行われなければなりません。高齢者にささげられた日を毎年祝うことは、わたしたちの司牧活動の定まった構造の中に、弱い高齢者への配慮を組み込む一つの手だてとなります。

高齢者への教皇フランシスコの配慮は、目新しいものとは言えません。近年の教皇たちも同様の注意を高齢者に向け、知恵と人間的な温かみのあることばをかけています³。教皇フランシスコは、その教皇職を通じて、高齢者との霊的な親密さを示してきましたが、このことは、彼を彼たらしめる教会論に照らして読み取られるべきものです。適切な司牧的配慮をつねに受けてきたわけではない他のグループと同じく、高齢者にも、神に忠実な聖なる民として、まさに果たすべき使命があります。教皇フランシスコは、彼らの務めは、記憶を保ち、若い人に信仰を伝えることだとしていますが、さらに重要なのは、彼らがカトリック信徒の中で重要な一員となることだと考えています。ただの教会の「利用者」なのではなく、旅の同行者でもあるのです。だからこそ、この世界祈願日は高齢者に関する文書を作成する機会ではなく、むしろ、高齢者に向けたメッセージがあり、そこにおいて教皇は、高齢者が教会の将来の歩みについて責任を分かちもち、パンデミック後の世界の建設に参加するよう求めているのです。これこそ教皇フランシスコが提唱する、シノドスの視点に適合する新たな何かです。教皇によれば、高齢者は、「信仰において誤ることのできない、信仰

¹ 教皇フランシスコ「聖金曜日の十字架の道行（2021年4月2日、サンピエトロ広場）」第13留。

² 信徒・家庭・いのちの部署「孤独の中で、新型コロナウイルスはさらに多くの人を殺す（2020年4月7日）」、
<http://www.laityfamilylife.va/content/laityfamilylife/en/news/2020/nella-solitudine-il-coronavirus-uccide-di-piu.html>

³ たとえば、ヨハネ・パウロ二世「高齢者への手紙（1999年10月1日）」、ベネディクト十六世「聖エディジオ共同体運営の高齢者施設『ビバ高齢者』訪問の際の講話（2012年11月12日）」。

の感覚 (sensus fidei infallibile in credendo) の主体」である洗礼を受けた信者の総体」⁴の一部を形づくっています。こうした考え方は、しばしば見落としがちな世代に対する司牧的配慮がいかに重要であることを示しています。高齢者はすでに福音化されているとしばしば考えられがちのため、彼らのことを忘れてしまうのです。

この第1回「祖父母と高齢者のための世界祈願日」は、使徒的勧告『愛のよろこび』5周年を記念して、教皇が家庭にささげた年の期間中に祝われます。これは、祖父母ではない人も含め、すべての高齢者は、生活の場としての家庭環境をどれほど必要としているか、また、年配の家族が果たす役割を家族が認識することがどれほど必要であるかということへの自覚による、意識的な選択です。グローバル化した世界では、高齢者と家族との関係はもはやあって当然のことではなく、つねに問題視されることですらあります。これは、地理的、文化的背景によって異なる意味合いをもつ傾向ですが、高齢者と家族の間に危機が募りつつあることを示唆する反復的な特徴があるもので、考慮すべき時のしるしです。家族に対する司牧活動自体、夫婦関係や親子関係ばかりに関心を向けがちで、高齢の親と成人した子どもとの関係や、祖父母と孫との関係に焦点を当てるのは簡単ではありません。

教皇はこれについて、回勅『兄弟の皆さん』の中で明確に述べています。「コロナウイルスが原因で、世界のさまざまな場所で、高齢の人たちに起きたことを目にしました。彼らは、そんなふうには亡くなる必要はありませんでした。しかし実際は、熱波やその他の要因により、似たようなことがこれまでも起きていました。彼らは、残酷に切り捨てられたのです。わたしたちは高齢者を隔離し、家族がふさわしく親しく寄り添うことなしに、他人の世話に任せきりにすることで、まさに家族を毀損し零落させていることに気づかずにいます。さらにそれは、若者から、自らのルーツと、自分たちだけでは手にできない知恵を得るために必要なつながりを奪い取ることとなります。」(回勅『兄弟の皆さん』19)。これは、あらためて示されなければならない重要なことばです。それは、家庭と家庭への司牧的配慮の、ある意味で忘れ去られた世代に対する恩義について考える助けとなるでしょう。

人々が落胆したり失望したりしないよう支える必要性に加えて、こうした複雑な状況(パンデミック、高齢者の新たな主導的役割の模索、家族関係の危機)から、教会は、集団で歩む旅に出て連帯をはぐくむ一つの単純な方法、つまり、祝うことを選択しました。高齢者と若者、すなわち、親と子、祖父母と孫、同じ家族に属している人もそうではない人も一緒になるのです。教会は、世代間の和解の必要性や、高齢者が経験する困難を認識していますが、だれの失敗も非難されることはありません。選ばれた方法は、ともに喜びに満ちた祝いのもつことです。

放蕩息子とあわれみ深い父親のたとえ話にあるように、祝宴は家庭を傷つけた分裂を克服しうるものです。息子はおそらく、父親が年老いて死が近いと考え、遺産を要求し、それを浪費しました。その父親は戻ってきた息子を歓迎し、ゆるしてくれたので、彼は年老いた親と、そして自分自身とも和解しました。それはすべて、彼らがともにした祝宴で祝われます。あわれみ深い父親は、問題や背信や曖昧さに気づいていないわけではありませんが、それでも祝うことを選ぶのです。わたしたちの心を満たし、「罪と悲しみ、内面的なむなしさと孤独から」(使徒的勧告『福音の喜び』1)解放してくれるのは、福音のよろこびだけだからです。それこそが世代間の新たな関係を築く基盤であり、高齢者の知恵の助けを得て、パンデミック後の社会をその上に築く岩となるのです。

だからこそ、第1回「祖父母と高齢者のための世界祈願日」を、すべての世代がかかわる祝宴の時として体験してもらいたいのです。それは単に幸せをもたらすということだけでなく、主は若者同様、高齢者の人生にも寄り添っておられることを知る喜びをもたらすものでもあるのです。「神はいつもわたしたちとともにいる」のです。

高齢者への司牧的関心を具体的に表現できる、多くの司牧の手段があります。教皇庁信徒評議会が数年前に発表した高齢者に関する文書を参照することは、そのための助けとなるでしょう⁵。それは、老後の意義と価値についての幅広い考察を含み、引き続き有効で今日の問題に直結した司牧的示唆を与えています。各

⁴ 「世界代表司教会議 注記(2021年5月21日)」。

⁵ 教皇庁信徒評議会「高齢者の尊厳と、教会と世界におけるその使命(1998年10月1日)」参照。

地方教会や個人が高齢者に寄り添うことのできる多くの手段の中で、簡単に実行できてとても効果的な方法を提案しましょう。彼らを訪問することです。それは、出向いて行く教会の具体的なしるしです。訪問というのは、伝統に根ざした方法であり、病気の人や刑務所にいる人も含めて、あわれみを示すことです。今日、わたしたちがよく知る七つの慈善のわざに、孤独な高齢者を訪ねるという「わざ」を加える必要があるようです。これを実行する人々に全免償を与えるという内赦院の決定は、その緊急性を強調しています。

ここで、この世界祈願日を祝うためのさまざまなアイデアを紹介したいと思います。この「祖父母と高齢者のための世界祈願日」の機会に、共同体の中で新型コロナウイルスによって亡くなった高齢者を追悼して、各小教区や教会組織がミサをささげることや、若者に、自分の祖父母やとりわけ孤独な高齢者を訪問して、教皇メッセージを伝えるよう依頼することもできるでしょう。わたしたちが提案したことばかりでなく、それぞれの教会共同体が創造性をもって、独自の状況においてこの日を祝う、最良の方法を見いだすことを確信しています。

この「祖父母と高齢者のための世界祈願日」が、すべての人にとって福音の喜びに満ちあふれた祝祭となりますように。

信徒・家庭・いのちの部署

長官 ケビン・ジョセフ・ファレル枢機卿

次官 アレシャンドレ・アウィ・メロ神父

■孤独な祖父母と高齢者を訪問する

- ・ 第1回「祖父母と高齢者のための世界祈願日」は、高齢者が物理的にミサに参加することが、いまだ多くの国で不可能な状況下で祝われます。
- ・ この世界祈願日に、親しみと慰めのメッセージが、すべての人に、もっとも孤独のうちにある人にも届くよう、祖父母や地域の独居老人を訪問し、教皇メッセージを伝えてください。
- ・ 訪問は、出向いて行く教会の目に見えるしるしです。パンデミックにより社会的距離が求められる今、訪問は、安全対策をとりながら高齢者に寄り添う方法を示しています。
- ・ 訪問することは、ちょうどマリアが年老いたいとこのエリサベトを訪問した際のように、立ち上がって、他者のところへと急ぎ駆けつけるという、個人の選びです（ルカ 1・39 参照）。
- ・ 訪問は、孫が祖父母に、また若者が訪問先の高齢者に、「いつも一緒にいます」と伝える機会でもあります。
- ・ 訪問は、花などのプレゼントを持参し、世界祈願日の祈りをともに唱える機会ともなります。
- ・ 訪問は、高齢者、とくに長い間家から出ていなかった高齢者が、ゆるしの秘跡と聖体の秘跡を受ける機会を提供する場ともなります。
- ・ 独居老人の訪問は、この世界祈願日に与えられる全免償を得る方法の一つです。
- ・ 衛生上の緊急措置によって、直接訪問することができない地域では、愛による想像力を働かせ、電話や SNS によって、独居老人に近づく方法が見いだせます。
- ・ SNS でハッシュタグ #IamWithYouAlways を付けて訪問の写真を投稿することで、世界祈願日のメッセージをシェアすることもできます。

■高齢者とともに世界祈願日を準備する

- ・ この日の活動のおもな対象は高齢者です。教皇メッセージは彼らに向けられています。
- ・ 世界祈願日にささげられる主日の典礼に対し、できるだけ多くの高齢者の直接参加を確実にすることが重要です。
- ・ 小教区や教会グループの高齢者を招待して、世界祈願日の教皇メッセージについて分かち合う時間を設

けることもできます。印刷したものを参加者全員に配布し、ビデオメッセージを一緒に見るのもよいでしょう。

- ・ 独居老人を訪問するだけでも、集いに参加できない人に教皇メッセージを手渡すことができます。
- ・ この世界祈願日の機会に接した祖父母と高齢者全員に、それぞれの共同体の特別な意向を添えて、教皇の祈りの意向をゆだねることもできます。

■若者と、この世界祈願日を準備する

- ・ 世界祈願日の数週間前に、皆さんの共同体の若者を集め、説明を加え、訪問によってできるだけ多くの高齢者に接することができるようにします。
- ・ 同様に、ミサの後に若者たちと集まり、訪問の手ごたえを分かち合うことができます。
- ・ 若者たちはソーシャルキャンペーンを企画し、ハッシュタグ#IamWithYouAlways を使って、世界祈願日についての情報を拡散することができます。

■新型コロナウイルスで亡くなった高齢者を思い起こす

- ・ 世界祈願日のミサ中、またはこの日のために用意された時間に、小教区や地域のパンデミックで亡くなった高齢者、とくに葬儀を行えなかった人のことを思い起こす時間を設けることができます。
- ・ 一つの方法として、共同祈願の終わりに高齢者の名前を読み上げ、祈念する一人ひとりのためにろうそくに火をともしというやり方があります。

■全免償

- ・ 5月13日、内赦院は「祖父母と高齢者のための世界祈願日」の機会に、全免償を与える教令を交付しました。
- ・ 高齢者は、この世界祈願日の際にささげられるミサの一つに参加することで、免償を受けることができます。
- ・ 衛生上の緊急措置が継続していること、また健康上の理由によって、直接ミサに参加できない高齢者を考慮し、免償は、テレビ、ラジオ、インターネットを通して参加した人にも与えられます。
- ・ 免償はまた、独りで暮らしている高齢者を訪問することによって世界祈願日に「慈善のわざ」を行った人全員にも与えられます。
- ・ 感染を避けるため、公的機関から直接の訪問が明確に禁止されている地域では、リモートによる面談によって免償を得ることもできます。

「2021年「世界宣教の日」教皇メッセージ

2021年「世界宣教の日」教皇メッセージ

「わたしたちは、見たことや聞いたことを話さないではいられないのです」（使徒言行録4・20）

親愛なる兄弟姉妹の皆さん

神の愛の力を経験したとき、個人や共同体の生活の中で御父の存在に気づかされたとき、わたしたちは、見たことや聞いたことを告げ、分かち合わずにはいられません。イエスの弟子たちとのかかわり、すなわち、受肉の神秘、福音、復活によって明かされたイエスの人間性からは、神がわたしたち人間をどれほど愛しておられ、わたしたちの喜びや苦しみ、望みや不安をご自分のものとされているかが示されます（第二バチカン公会議『現代世界憲章』22 参照）。キリストにおける何もかもが、わたしたちの生きる世界とそのあがないの必要性はキリストにとって他人事ではないことを思い起こさせ、また、この宣教活動に積極的に加わるよう呼びかけています。「町の大通りに出て、見かけた者はだれでも婚宴に連れて来なさい」（マタイ 22・9）。だれもよそ者ではなく、このあわれみの愛を、自分とは無関係な縁遠いものと思う人はいないのです。

使徒たちの体験

福音宣教の道のりは、どこにしようとも一人ひとりと呼び出し、友としての対話をしたいと望んでおられる主を（ヨハネ 15・12—17 参照）熱心に探し求めることから始まります。それを教えてくれるのは使徒たちです。彼らは、そのかたと出会った日時すら覚えています。「午後四時ごろのことである」（ヨハネ 1・39）。使徒たちは主との友情の中で、主が病人をいやし、罪人と食事をし、飢えた人に食べ物を与え、排除された人のもとへ行き、汚れているとされた人に触れ、困窮者とご自分を同じくされる姿を見ました。真福八端へと招き、新しい権威に満ちたしかたで教え、消えることのないしるしを残す主を見ることによって、驚きと抑えきれぬ無償のあふれ出る喜びを呼び覚ますことが可能になったのです。預言者エレミヤが語っているように、この体験が、わたしたちの心の中で生きておられる主の燃え上がる炎であり、わたしたちを宣教へと駆り立てるのです。たとえ、それがわたしたちを犠牲や無理解にさらすことがあってもです（20・7—9 参照）。愛はつねに動きのあるものであり、もっとも美しく希望に満ちたメッセージを分かち合うべく、わたしたちを動かすのです。——「わたしたちはメシアに出会った」（ヨハネ 1・41）。

イエスによってわたしたちは、物事は多様でありうることを目にし、聴き、ふれてきました。このかたは、しばしば忘れられてしまうわたしたち人間の本質、すなわち「わたしたちは、愛においてのみ、たどり着くことのできる充満のために造られている」（「回勅『Fratelli tutti』68）ことを思い起こさせることによって、今日すでに、先の時代を開いたのです。

共同体を形作り開始するための推進力を内に秘めた信仰を奮い立たせる新しい時代、それは男女が自身と他者の脆弱さを引き受けることを互いに学び合うことに端を発し、兄弟愛と社会的友愛の中で促進されます（同 67 参照）。教会共同体は、主がまずわたしたちを愛してくださったこと（一ヨハネ 4・19 参照）を感謝をもって思い起こすたびに、そのすばらしさを表します。「主の深い愛には衝撃を受けますが、この驚きはその性質上、わたしたちがどうこうできるものではなく、無理に抱かせることもできません。……無償の奇跡、無償の自己贈与という奇跡は、そうしたかたちでのみ花開くのです。宣教への熱意も、考えたり計算したりして得られるものでは決してありません。『宣教状態』に身を置くということは、感謝の気持ちの表れなのです」（「教皇庁宣教事業へのメッセージ（2020年5月21日）」）。

しかしながら、楽な時代はありませんでした。初代教会のキリスト者は、敵意と困難な状況の中で彼らの信仰生活を始めました。隅に追いやられた時代と投獄され内部と外部の対立が絡み合い、これまで自分たちが目にし、聴いたことですらも否定し矛盾しているかのように映る状況でした。しかしそれは、彼らを退かせたり、引きこもらせたりする困難や障害とはならず、かえって彼らを、障害、反対、困難をことごとく宣教の好機に変えるよう駆り立てたのです。制約や妨害もまた、主の霊によってすべてのものとすべての人に油を注ぐ、恵みの機会となりました。何一つ、だれ一人、この解放の告知に無縁なはずはないのです。

わたしたちはこうしたすべてについての生きたあかしをおさめた使徒言行録を持っており、この書物は宣教する弟子たちが常に大切にしてきたものです。福音の香りがどのようにして広がり、主の霊のみが与え

る喜びを呼び覚ましたかを記した書です。使徒言行録はわたしたちに、キリストを胸に抱くことによって試練を生きることを教えています。それによって、「神はあらゆる状況の中で、失敗と思われる状況でさえもお働きになるという確信」や、「愛ゆえに自らをささげて神にゆだねる人は必ず実を結ぶ（ヨハネ 15・5 参照）」（使徒的勧告『福音の喜び』279）という確信が成熟するのです。

わたしたちも同じです。今のこの時代も、たやすくはありません。パンデミックという状況は、すでに多くの人が苦しんでいる、痛み、孤独、貧困、不正義を明らかにして増大させ、またわたしたちの偽りの安心感、わたしたちを密かに引き裂く細分化や分極化を露わにしました。もっとも弱くて傷つきやすい人が、なおいっそう脆弱に、壊れやすくなったのです。わたしたちは落胆し、幻滅し、疲労し、希望を奪うあきらめの気持ちに、視野が遮られてしまったのです。けれどもわたしたちは、「自分自身をのべ伝えるのではなく、主であるイエス・キリストをのべ伝えています。わたしたち自身は、イエスのためにあなたがたに仕えるしもべなのです」（二コリント 4・5）。ですからわたしたちは、自分の心にこだまし、語りかけるいのちのことばが、共同体や家庭で鳴り響くのを感ずります。「あのかたは、ここにはおられない。復活なさったのだ」（ルカ 24・6）と。

希望のことばは、そのことばにふれるがままでいる人にあらゆる決定論を打ち破らせ、自由と立ち上がるために必要な勇気を贈ります。そして創造性をもった共感を生きるすべての方法や、だれ一人道端に捨て置きはしない神がわたしたちと近しくあられるという「秘跡性」を探し求めます。

このパンデミックの時代、正しいソーシャルディスタンスという名目で、無関心と無感動をマスクで覆って正当化する誘惑に直面する中で、求められる人との距離を、出会い、世話、活動の場にできる、あわれみの宣教が急務です。「見たことや聞いたこと」（使徒言行録 4・20）、つまり、わたしたちが受けてきたあわれみが、「時間、努力、財産を割くべき、帰属意識と連帯の共同体」（回勅『Fratelli tutti』36）を築くべく、皆で抱く情熱を取り戻すための基準点となります。主のみことばこそが、毎日わたしたちをあがない、「どの道変わりはない、何をしても無駄」というもっとも卑しむべき懐疑主義に閉じこもる言い訳から救い出してくれるのです。「自分には大して利益もないだろうに、どうして己の安全、快適さ、快楽を手放さなくてはならないのか」という問いに対し、いつも答えは同じです。「イエス・キリストは罪と死に打ち勝ち、力に満ちておられるのです。イエス・キリストはまさしく生きておられ」（使徒的書簡『福音の喜び』275）、わたしたちにも生きてほしい、友愛をもって、この希望を抱き、分かち合えるようでいてほしいと願っておられるのです。現在の状況で早急に求められているのは、希望の宣教者です。自分一人で救われる人はだれもないことを預言的に気づかせてくれる、主に油注がれた者です。

使徒や初代教会のキリスト者のように、わたしたちも声を限りに語ります。「わたしたちは、見たことや聞いたことを話さないではいられないのです」（使徒言行録 4・20）。わたしたちが受けたものすべて、主がわたしたちに与えてくださったものすべては、わたしたちがそれを持ち出し、他の人に無償で与えるために主から与えられているのです。イエスの救いを見て、聴いて、体験した使徒たちのように（一ヨハネ 1・1—4 参照）、今日のわたしたちもまた、日々の歩みの中で、苦しみと栄光を受けたキリストの肉に触れることができ、すべての人とともに、希望の未来を共有するようにとの励ましを得られるのです。これは、主はいつもわたしたちに寄り添ってくださっているとの認識から生まれる、疑いのないしるしです。わたしたちキリスト者は、主を自分のもとに留め置くことを許されていません。福音化という教会の宣教は、世界の変革と被造物の保護における、自らの全面的かつ公的な意義を表しています。

わたしたち一人ひとりへの招き

今年の世界宣教の日のテーマ、「わたしたちは、見たことや聞いたことを話さないではいられないのです」（使徒言行録 4・20）は、「任を引き受け」、心に抱く思いを伝えるようにという、わたしたち一人ひとりへの招きです。この宣教が常に教会のアイデンティティであり、これまででもずっとそうでした。「教会はまさに福音をのべ伝えるために存在しています」（聖パウロ六使徒的勧告『福音宣教』14）。孤立状態になったり、

少数グループに引きこもってしまうと、わたしたちの信仰生活は弱まり、預言する力や、驚嘆し感謝する能力を失います。信仰生活には、その独自のダイナミズムゆえに、すべての人に到達し、すべての人を抱きしめることのできる、開放性の高まりが必要です。初代教会の信者たちは、閉鎖的なエリート集団を形成する誘惑に屈することはありませんでした。主に見聴きしたこと、すなわち「神の国は近づいた」ということを、人々の中に分け入ってあかしするという、主から与えられた新しい生き方に魅了されたのです。彼らは、自身の努力と献身による実りを他者が食することになると知りつつ種を蒔く人のように、惜しまず、感謝しつつ、誇り高く、そうしたのです。だからこそ、わたしはこう考えたいのです。「どれだけ弱い人でも、障害者も、傷を負っている人も、それぞれのかたちで宣教者となるはずで、そこにたくさんのもろさが共存していたとしても、よいものを伝えるということをいつも可能にしていなければなりません」(使徒的勧告『キリストは生きている』239)。

毎年、10月の最後から2番目の日曜日に祝われる世界宣教の日にわたしたちは、福音の寛大で喜びに満ちた使徒になるという洗礼がもたらす義務を一新すること、その人生のあかしをもって励ましてくれるすべての人を、感謝のうちに思い起こします。なかでも、多くのいのちが恵みに渴いている村や都市の隅々に、遅滞なく、恐れを感じることなく福音が届けられるようにと、故郷を出て家族から離れて出発した人々を思い起こします。

宣教者としての彼らのあかしを見つめることで、勇気ある者となるよう、そして、「収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に」(ルカ 10・2) 粘り強く願うよう励まされます。宣教への召命は過去のものでもなければ、別の時代の感傷的な思い出でもないと感じているからです。今日イエスは、世界の周縁部へと出向かせ、いつくしみの使者、あわれみの道具とする、真の愛の物語として自らの召命を生きようとする心を必要としています。そしてこれこそが、方法は異なれども、主がわたしたち全員に向けて行っている呼びかけです。周縁部は、わたしたちの近くに、都市のただ中に、家庭の中にもあることを忘れてはなりません。愛が普遍的に開かれていくことには、地理的ではなく実存的な面もあります。いつであっても、しかしとりわけこのパンデミックの時代には、身近にいてもおよそ「自分が関心ある世界」の人だという気がしない人のもとに行き、自分の仲間の輪を広げようとする、日常的に働く力を高めることが必要です(回勅『Fratelli tutti』97 参照)。宣教を生きるということは、キリスト・イエスと同じ感覚をもつ覚悟をすることであり、主によって、そばにいる人はだれであれ、自分の兄弟姉妹であると信じることです。主のあわれみの愛がわたしたちの心をも目覚めさせ、わたしたち皆を宣教する弟子にしてくださいように。

最初の宣教する弟子、マリアが、洗礼を受けたすべての人の内にある、地の塩、世の光(マタイ 5・13—14 参照) となりたいという望みを強めてくださいますように。

2021年1月6日 主の公現の祭日

ローマ、サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ大聖堂にて
フランシスコ

カトリック中央協議会 「会報」 2021年8月号 (通巻590号)

発行日 2021年7月20日

発行 宗教法人カトリック中央協議会 <https://www.cbcj.catholic.jp>

〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10 電話 03-5632-4411 Fax 03-5632-4457